



ひれ伏しました。

その様子を  
見た藤樹先生  
は、静かに刀  
をさやに納め  
ました。

追いはぎ頭「藤  
樹先生、情

けない姿を見せてしまいました。

おゆるしくくださいませ。」

追いはぎ頭「おゆるしくくださいませ。」

頭に続いて、手下の追いはぎ達も、  
口をそろえてあやまりました。

⑧ 先生「私にお名前を聞いただけで、あやまる気持ちになつたのは、自分たちが悪いことをしているのが、よく分かっているからか。」

追いはぎ頭「はい、分かっているながら、  
やめられず続けていました。」

先生「追いはぎをするようになったことは、何かわけがあつてのことだろう。良かったら話してもらえぬ



かな。まあ、  
みんな輪に  
なつて座ろ  
うか。」

追いはぎ頭「はい、どうも  
すみません  
でございます。  
」

追いはぎ達は、先生を囲むようにして、腰をおろしました。

⑨ 追いはぎ頭「私も、家族が多  
くて、貧しいくらしをしている者  
ばかりです。子ども達は、いつも  
腹をぺこぺこにへらしてやせ細つ  
ておりました。それでついつい楽  
な稼ぎを考え、仲間を誘い合つ  
て、こんな追いはぎという情けな  
いことを始めました。みんなを  
誘つた頭の私が、一番悪いので  
す。」



⑩ 追いはぎ1

「先生、頭  
だけが悪い  
ではありません。  
去年は、よく  
雨が降り、  
お米は少し  
しかとれま  
せんでした。その上、家族が病氣  
になつて薬代もなくて、ついつい  
……、仲間になりました。」

追いはぎ2「私のところも同じです。

追いはぎが人の道に外れているこ  
とは、分かっています。しか  
し、子ども達や年とつた親には、  
少しでもいいから栄養のあるもの  
を食べさせたいと思つて……。」

追いはぎ達は、涙をこぼし、鼻を  
すすりながら話しました。藤樹先生  
は、涙ながらに話をする追いはぎ



達の家のよう  
すを思い浮か  
べ、温かいま  
なざしで、聞  
きました。

⑪ 先生「お前  
たちの苦し  
い生活はよ  
く分かつた。

しかし、追いはぎで金を稼いで、  
人様を泣かせていることを家族が  
知つたら、決して喜ばないと思  
うが、どうだ。」

追いはぎ頭「本当のことを知つたら、  
家族はどんなに悲しむことか  
……。しかし、こんなことをして  
いる私共は、もう元に戻りたくて  
も戻れない。どうすればいいの  
でしょうか。」



ないかな。」

追いはぎ達「はい、約束します。」  
追いはぎ達は、声をそろえて言  
いました。先生は、

先生「今日を限りに、まじめなら  
しに戻るこ  
とだ。苦し  
いくらしで  
も、家族で  
力を合わせ  
てやること  
が、一番だ。  
この私に約  
束してくれ

先生「それを聞いて安心をした。こ

の二百文のお金を分け合つて、し  
ばらくの生活に使いなさい。毎  
日、忙しいと思うが、『藤樹書  
院』へ時々来て、私の話を聞いた  
り、困つたことを相談したりし  
ておいで。」

追いはぎ達「はい、分かりました。」

⑫ 数日してからの夜のことで。先  
生の勧めを忘れずに、男達三人が目  
を輝かせて、『藤樹書院』にやつて  
来ました。

——はりきつた声で——

男達「先生、今晚から勉強させてく  
ださい。今日は、早く田んぼの仕  
事を終えて、先生のお話を聞きに  
まいりました。」

先生「そうか、そうか。まじめに働  
いているのだな。よく来てくれた。



ここは、だ  
れでも、勉  
強ができる  
所だからね。  
さあさあ、  
上がりなさい。  
い。」

それからと  
いうもの、男  
達は生まれ変わったかのようにまじ  
めに働き、先生の勉強会にも熱心に  
参加して、家族を幸せにしました。

(おしまい)